

2020/7/17

大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議 発表資料

一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会 牧田和樹

教育の専門家ではありませんが、企業経営、PTA 活動、経済団体活動などに関わっている、いわゆる一般社会人としての感覚を基に、検討のキーワードについて所見を述べます。

学力の 3 要素

- とりわけ「主体性・多様性・協働性」とは？
- 具体的に定義できるのか？
- そもそも「〇〇性」と呼ばれる人間の性質は、両面からとらえられ評価される
ex. 議論で発言が多い = 積極的 ⇔ 自己中心的(他者への配慮不足)
- 具体的に定義できなければ評価もできない

大学入学者選抜(入試)

- 大学に入学しようとする者を選抜するためのもの
- 大学の個性、独自性を尊重するのであれば、大学個別の検査を実施することが大原則

学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

- 企業は入試偏差値の高い大学から採用したがる傾向がある
- 企業がディプロマ・ポリシーと卒業生の資質・能力の相関をどうとらえているのか？
- 企業が大学入学前の資質・能力を頼るのはなぜか？
- 大学は学位に値する卒業生を輩出しているのか？
- 大学に進学する目的が、学究機関から就職準備機関へと変化した
- 「社会で良き人生を歩む(高大接続最終報告)」ための力とは？
- 企業から評価される大学の存在価値とは？

教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)

- 大学教育において学力の 3 要素をブラッシュアップできているのか？
- 「社会で良き人生を歩む(高大接続最終報告)」ための力をつけているのか？
- 大学教育改革こそ最優先課題であり、その関係線上に大学入学者選抜があるのでは

入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)

- 大学が独自に学力の 3 要素の評価方法を考案し実施できなければ、定義できない
- カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを具現化できないものは入学させない

多面的・総合的な選抜方法

- 大学が独自に選抜方法を考案し、実施することが大原則

- 多面的・総合的とは？それを具体化できるのか？（当然、ポリシーの明確化が前提）
- 人間社会において多面的・総合的な評価手法は？
- 人間社会は人と人（時間・空間）で成り立っていて、それをコミュニケーションがつかないでいる
- コミュニケーションの理想は双方向の対話（面接）

調査書

- 一般入試ではほとんど活用されない現実がある
- 入学者選抜に必要な内容が記載されているのか？
- 記載者による評価能力や記載能力などの差はないのか？
- 評定平均値の高等学校間の差をどう評価するのか？
- 調査書は高等学校ならびに記載教師の入試になっていないか？

大学進学率

- 短期大学を含め約 58%（4 年制約 54%）
- すべての高校生が大学進学するわけではない
- 3 年生になってから大学進学を決める生徒もいる
- 日々活動や学習の進捗を記録するポートフォリオなどの受験へ活用は不利となる
- そもそも調査書やポートフォリオなどをよく見せるための高校生活になる
- 調査書などをよく見せるノウハウ提供のための受験産業が勃興する
- 子供の学力格差と保護者の経済格差の相関がより高まる（自由経済市場原理的には当然）

一般入試（一般選抜）

- アドミッション・ポリシーが満たされるよう、大学が独自に選抜方法を考案し、実施することが大原則
- 受験者の数が多い
- 入試方法が複雑になればなるほど手間がかかる
- 手間がかかればそこに割くリソースも増え、時間の制約もうける
- 多面的・総合的に評価することが困難
- AIを活用することでリソースを抑えることは可能
- アドミッション・ポリシーがAIに耐えうる内容でなければならない

AO 入試（総合型選抜）

- ディプロマ・ポリシーが満たされるよう、大学が独自に選抜方法を考案し、実施することが大原則
- 学力の 3 要素をバランスよく評価できる
- 一定レベルの「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を有することが前提で、筆記試験は必須
- 「主体性・多様性・協働性」は大学独自の評価基準が必要となる

推薦入試（学校推薦型選抜）

- 学校推薦枠がない高等学校の生徒は推薦入試の機会を与えられない
- 進学した高等学校により受験機会の平等は失われる

履修主義と修得主義

- 高等学校の卒業要件は満たされているか？
- 履修主義では確認できない現実がある
- 大学入学者選抜に臨む前に、全国共通修得度確認テストのようなものを実施するとよい
- そのテストの成績により、それぞれの大学入学者選抜に対する受験基準(足切り)にするとよい
- 浪人生は受験前に再度そのテストを受けるようにする

【検討事項に対する所見】

○大学入学者選抜における多面的な評価の内容や手法に関する事項

学力の 3 要素を多面的に把握するにあたり、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価するには筆記試験(小論文等を含む)が最適であり、加えて、面接試験において直接ディスカッションすることで、より深く評価できると考えます。また、「主体性・多様性・協働性」の評価は、人間の性質に関わることであり評価基準によっては正反対の結果となる可能性があるため、これを教師が記載する調査書や履歴を記載するポートフォリオなどに求めることは十分に内容を伝えられない要因となりえます。したがって、直接受験者と双方向でコミュニケーションできる面接のみによってしか、多面的に評価できないと考えます。その際に受験者本人より、これまでの履歴と大学入学希望理由についてまとめた書類を提出してもらい面接のベースとするのがよいのではと考えます。加えて、調査書やポートフォリオなどが不要となれば、浪人生へもAO入試の門戸を拓けることができます。

選抜区分において、一般入試ならびにAO入試においては筆記試験と面接試験(本人記載書類提出を含む)を組み合わせることで多面的な評価が可能と考えますが、一般入試は受験者数も多いことから、本人記載書類の評価においてAIの活用が現実的ではない段階では、筆記試験のみでの評価に限界があります。したがって、就職試験に用いられる適性検査のような類いを導入することで、多少の補完が可能ではないかと考えます。推薦入試については、すべての高等学校に門戸が開かれているわけではなく、AO入試を積極的に導入しようとしている現在、その役割は終えていると考えます。

多面的に評価することの意義は、受験者本人の受験時点における評価を様々な角度から行うことにあると考えます。本人がどのような人生を過ごしてきたか、活動や学習の履歴を振り返るなどの、これまでのことについて評価することは多面的ではないと考えます。

○調査書の在り方及び電子化手法に関する事項

○調査書や志願者本人記載資料の活用及び大学への情報提供の在り方に関する事項

大学入学者選抜は大学独自のものであり、大学の自助努力において実施されるべきものと考えます。現行、高等学校に求めるものは履修主義に基づいた卒業(見込)証明だけでよく、その証明された高等学校の卒業要件について大学側で事前調査しておけば、受験生を選抜するための試験以外の情報はそれで整うと考えます。したがって、現在も一般入試ではほとんど活用されていない調査書は廃止すべきであり、また、AO入試においても各ポリシーが明確化され、明確な判断基準のもと筆記試験と面接試験が実施されれば調査書は不要となります。また、調査書は受験者本人が記載するのではなく、教師が記載する現実において記載内容が増えれば増えるほど、記載者の文章力などの能力に影響をうける可能性がありますそのリスクはヘッジできません。

次に、ポートフォリオなどの学習や活動成果の記載(データ化)についても、記載内容をよく見せるための活動に終始することが予想され、活動することが本来の目的であるのに記載することが目的化してしまう懸念があるので、入学者選抜への導入は不適切であると考えます。加えて、浪人生への対応も課題となり、浪人している期間の履歴をどのように扱うのかについて簡単に解決できないのではと考えます。ただし、大学入学希望理由については受験者本人の意欲の発露であり、ポートフォリオなどに代え受験者本人に記載、提出させることに意義はあると考えます。また、すべての高校生が大学に進学するわけではないので、ポートフォリオなどが日々の高校生活を充実するために活用されることには大賛成ですが、そこに入学者選抜利用となれば、大学進学をしない生徒との間で活動意欲などに温度差が生じ、生徒間のトラブルにも発展する可能性があります。さらに、受験産業の参入により生徒間の意識のズレはさらに大きくなると想像します。これはまさに、高大接続改革の高等学校に影響を与える負の面だと考えます。

いずれにしても、大学においては高等学校で作成する調査書に頼ることなく、受験生本人が記載するポートフォリオなどにも頼ることなく、自己責任、自助努力において入学者選抜の多面的評価を実施されればよいと考えます。それがひいては大学独自の評価となり、企業から求められる多くの卒業生を輩出できる基盤になるのではないのでしょうか。

以上